



七月や三密の良き佛たち
 宮地良彦
 病む人へ天の深さや冷し桃
 西牧千恵子
 衣脱や仏と老いの骨休み
 今井愛子
 硯海に青水無月の日が渡り
 松本よし乃
 土器を焼くしづかな炎夏休
 篠遠良子
 菖蒲湯に沈め癒すや被爆の身
 小谷一夫
 熊蟬の檄や八十路の日々の糧
 上江洲萬三郎
 石山に来て葛餅のてろんてろん
 長尾裕美子
 悔いひとつ閉ぢこめておく冷蔵庫
 栗林久子
 朝摘みのみづ折る音の木霊せり
 伊藤由希子
 炎天や鋳物工場に塩の甕
 玉井利之

夏霧や木を抱へれば木とひとつ
 五味真穂
 木に登り見むフィレンツェの大花火
 原田宏子
 いかづちを呼ぶや地球の芯は鉄
 竹岡みち子
 鶉は川を背にして並ぶ鎮魂歌
 市原啓子

芥子ひらく街に溢れる無言の行
 千田幸子
 げぢげぢの不眠の吾の床に入る
 小林春代
 若き日と同じ光の汗ひかる
 宮村明希
 わが友よ凶太く生きよ牛蛙
 大西健文
 イ予ちよくの倅さやに余花の雨
 甲田和利
 旅人の憩ふ湧水貸小袖
 下条久子
 夏草を積みて馬車行く八望台
 今野晶子
 日の差せば蜥蜴の息の早まれり
 増田義幸
 麻疹の子菩薩のごとく立ち上がる
 矢島栄子
 七夕や牛を飼ひ来て米寿なり
 金井勝代

万緑や秒針の音ひし ひしと
 神林利一
 脳にまで響く胡瓜の咀嚼音
 青木義典
 床下に記憶なき靴桜桃忌
 青木豊子
 願文がんもんの晩禱近江に大銀河
 松岡善郎
 密などはどこ吹く風と沼の蝌蚪
 市川静子

岳の源泉 九月

493

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

はじめに。八月十七日に五か月ぶりに上京した。十分に身を護る配慮をし、密に気をつけた。かねて待たれていた講座を済ませたのであるが、関東圏の参加者の迫力に圧倒された。

コロナは迫力で吹き飛ばせるものではないが、誰にも会わない籠居中には生きる気力まで減退しかねない。非科学的なことをいうつもりはないが、コロナ禍での好奇心という創作者の気力をいかに維持するか、現代人は自然への関心も人への関心が根底にあることに改めて気づいたのである。

衣脱という珍しい地貌季語を生かす

衣脱や 仏と 老いの 骨休み 今井 愛子

一月遅れの七月一日を新潟では「きんぬぎついたち」と呼ぶ。蛇が「きん」(衣)を脱ぐ、季節の変わり目で身を慎めという。暑いさなか、仏も老いも骨休みという地べたの匂いとする土俗の季語に、生きる知恵があるようだ。米どころ越後の地貌が見える句である。

病む人へ 天の 深さや 冷し 桃 西牧千恵子

句会には休んだことがない作者が休む。聞くと連れ合いが

熊蟬の 檄や 八十路の 日々 糧 上江洲萬三郎

沖繩の作者。沖繩流長寿の秘訣には、爆音ではなく熊蟬の声を。本土以上に自然を生きる糧にしている。そこに感銘がある。

石山に 来て 葛餅の てるんてろん 長尾裕美子

石山寺詠。なんとも頼りない葛餅。神道に造詣の深い作者。とろけるような「てるんてろん」にも格別な神意がおりるか。

悔いひとつ 閉ぢこめて おく 冷蔵庫 栗林 久子

「悔い」とはなんぞ。人にいえない心情か。忘れたいのであろうが、冷蔵庫にしまっておくとは意外性がある。

今月の秀句

七月や 三密の 良き 佛たち 宮地 良彦

この「三密」は密教の行者の働き「身密」(手に契印を結ぶ)、「口密」(口で真言を唱える)、「意密」(心に本尊を観る)をいう。七月は暑さに清潔さがある月。六月は水っぽい。八月は倦みだれる。七月の本堂によき距離を保ち配置された佛たちを想像されたい。作者九十五歳の傑作ではないか。季節は違うが、「菊の香やならには古き仏達」(芭蕉)に迫る。

重篤という。その折に投句された。真実、名句だ。「天の深さ」とは折るのみの心境であろう。手元には一口でも食べて欲しいと冷した桃がある。愛そのもの。つぐことばがない。

硯海に 青水無月の 日が 渡り 松本よし乃

書道の大作に挑まれておいでか。大きな硯を眼の前にしての感慨。時間との対決であり、また偶然が傑作を生む。芸とはそういうもの。運である。運が不意に訪れるように不断の修練を積むのであろう。

土器を 焼くしづかな 炎夏休 篠遠 良子

やさしくて心が入っている。俳壇賞受賞を契機に一段と俳句に身が入る。作品に豊潤さを感じられる。感度とはわずかな香氣、そこに勉強・研究から得た知力を加えてほしい。

菖蒲湯に 沈め癒すや 被爆の身 小谷 一夫

長崎の作者。折から菖蒲湯に浸かる。七十五年前の被爆は生涯の深手であった。「沈め癒す」から癒し難さが伝わる。「沈み癒す」ではない。負の体験者として、世界に向かっての真の平和を求める叫びである。菖蒲は尚武へ通じる反措定。原爆を含め武器廃絶への禱りを籠めていとも読めよう。

朝摘みの みづ折る音の 木霊せり 伊藤由希子

「みづ」は湿地に生える多年草の鱗草。茎葉ともにみずみずしく、秋田では夏の山菜の代表。秋にはむかごができる。折る音が木霊するほどの静寂とは、みちのく秋田の地褒め。

炎天や 鋳物工場に 塩の 甕 玉井 利之

炎天下の鋳物工場の高温に耐える塩分補給のための甕であろうか。リアルな状況を的確に捉えている。

他に同人集から推薦候補作をあげる。

青野 ゆく少年の 日の 吾と ゆく 辰野 利彦
光 蘇もの 言ふごとし 楸 邨忌 小林 邦子
ドリス・デイこそ 深ぶかと 梅雨の 底 玉木 愛子
雨粒の ひらたく 見ゆる 山開 比田井喜美子

フィレンツェの大花火の見方

木に登り 見む フィレンツェの 大花火 原田 宏子

木に登って見たい、フィレンツェで打ち上げられるアルノ川沿いの大きな花火を。私は、亡き夫への追悼句と読んだ。「木に登り見む」がいい。ささやかな発見で句は秀逸になる。

いかづちを 呼ぶや 地球の 芯は 鉄 竹岡みち子

地球の芯は鉄。そこが雷を呼びつける元凶とは、身も蓋も

ないいい方で、ズバリ深層に迫る。作者は病態医化学者、端的だ。この剛腕の表現は、情緒疲れの並みの俳人ではいい得ないところ。上田五雨門からかなり長い俳歴があるが、近年熱心この上ない。だれも詠めない非情の情を突く。

鶺鴒は川を背にして並ぶ鎮魂歌 市原 啓子

鶺鴒が始まる直前の光景か。鶺鴒が鮎に対して鎮魂の思いを抱いていようとは。巧み。

芥子ひらく街に溢れる無言の行 千田 幸子

コロナ禍の無言の街。口をマスクで覆い、話さない。ああ美しいと話しても飛沫が飛ぶ。嫌な世になった。ウィズコロナ(コロナとともに)とは変なことば。辛抱辛抱。

げちげちの不眠の吾の床に入る 小林 春代

今月の秀句

夏霧や木を抱へれば木とひとつ 五味 真穂

夏霧の効果抜群。単に霧では平凡。古来の浪漫のおさらいのようだ。ささやかな冒険は夏霧に気づいたことに尽きる。生気が立つ。新しい生き方がそこに見えるではないか。句集『湛ふるもの』を上梓し、踏み出す一歩への決意と読める。

眠れないときは嫌な幻想を抱く。これで眠れるといいが。

若き日と同じ光の汗ひかる 宮村 明希

汗は老若同じ。前向きな人は汗ひとつをもこんな風に見る。表現とは見方ひとつの違い。そのひとつとは知的感性である。人が詠んでも、均して自分の掴み方で捉え直す。「荘子」はこれを「斉物」と呼んだ。表現の本質はここにある。

わが友よ図太く生きよ牛蛙 大西 健文

弱気の友、あるいは病中への激励か。配合の牛蛙は常套的かもしれないが、率直な愛情が滲む。あるいは自分への叱咤か。共感を呼ぼう。

イテの倅さやに余花の雨 甲田 和利

「イテ」はたたずむことをいう。残花の雨から亡き人の倅が浮かぶ。しずかな作。俳歴が長い作者。ことばに凝り過ぎるので句に勢いが足りない。漢語を減らす。その上で多作する。着想は秀逸。

旅人の憩ふ湧水賃小袖 下条 久子

旅人に湧水。城下町松本辺の七夕風景が懐かしい。絵葉書のような感じをいかに自分の風景に変えるか。そこが課題。

夏草を積みて馬車行く八望台 今野 晶子